

荒野の父

戸澤 三二子

雪国の三月
がちがちに固くなったよこれ雪
細くて弱々しい光では
まだまだ溶けそうになかった
父は空をにらんで
大きなため息を吐いた

開拓農民の我が家は
苦しい暮らしの最中であつた
父は一日も早く
荒野を開墾して畑を作り
穀物を育てたい
その思い
小学三年生の心に沁みた

やがて四月
雪が溶けた大地から
生まれたての春の足音が聞こえ始める
父は何十年振り
親子が再会するように
顔をほころばせていた
そして力強い光に誘われ
野良着に着替えて地下足袋を履いた

日焼けした額に汗がにじんでいた
その汗
あごを伝ってしずくになり
からっと晴れた大空の下に
キラリと落ちた

遠くになった昭和の光景は
いつしか情景となり
シルエットの父は
何事もなかったようにほほえんだ

あの荒野
宝の田畑に生まれ変わった
見渡す限りの美しい風景に
父が流した
汗の重さを感じている